
僕と彼女の最期のChristmas

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の最期のChristmas

【Zコード】

Z0482Z

【作者名】

まなか

【あらすじ】

あのとき、僕は何を考えていたんだろう。

思い出すのは彼女の柔らかい唇、雪のように綺麗な手。それもだんだん現実味がなくなつてきてしまった。彼女がいなくなつてから僕はずつと彼女を追い続けていた。姿形ないものを

そして彼女がいなくなつてから一年。クリスマスがやってきた。綺麗に輝いているツリーを見上げていると 突然、彼女が現れたのだ

0-1話「序章」（前書き）

最初はかなり暗いですが、読み進めていくにつれて明るくなる
はずです。

01話「序章」

あのとき、僕は何を考えていたんだろう。

思い出すのは彼女の柔らかい唇、雪のように綺麗な手。それもだんだん現実味がなくなってきた。彼女がいなくなつてから僕はずつと彼女を追い続けていた。姿形ないものを

+ * +

2011年12月24日

「寒い……い

思わず口に出してしまつ。それがまた空しさを増した。一年前のこの日も寒かった。同じようなことを口にしたと思う。彼女は笑つて「そうだね」とだけ言つてその華奢な身を寄せてきた。僕はそれに応えるように腕を回した。

僕は筆記用具などの事務用品を作つている会社に勤めている。入社して3年。もう会社にも慣れ、この毎朝の通勤ラッシュにも慣れだ。慣れないのは彼女のいない生活だった。彼女の名前は空水七里。僕より一つ年下の後輩。僕が入社して一年後に同じ部署に入ってきた。初めて持つ後輩、僕は嬉しかつた。仕事を教えるうちに仲は良くなり、一年半前ほどから付き合つていた。笑顔が可愛かつた、ふとした仕草が可愛かつた、声も可愛かつた、何もかも、可愛かつた。だけど彼女は雪だるまが翌日水たまりに変わつてゐるようにある日、消えた。そう、消えた。行方不明。警察に依頼した。だけど見つかなかつた。そして捜査は中断された。

いつもの席に着く。この会社が作つた事務用の回転する椅子だ。背もたれにもたれるとぎしりと音を立てて傾く。隣をみた。
「矢田先輩、ここが閑敷つてどうやるんでしたつけ?」

声が聞こえてくる。あの優しい柔らかな声だ。そう、彼女はいつも表計算ソフトの使い方で僕に訊いてきたつ。 そう思っても空しさが余計に募るだけだった。

01話「序章」（後書き）

こんばんは、まなつかです。

今回は毎年恒例！ クリスマス小説です。

去年は*Christmas of the rain*を発表しましたね。いまいちでしたが、今回は少し気合を入れて書いています。そしてクリスマスには完結する予定です。

最終話は作家らしくファミレスにわざわざ行って書く予定です。

作家じゃないけど。

それではまた2話で会いましょう。

〇二話「七里との再会」

一日の仕事を終えてわざわざ隣の大きな駅前へと向かつた。その駅前には大きなクリスマスツリーがあり、きらきらと輝きながら僕を見下ろしていた。

去年は一緒に見ていた。握りあつた手。絡めた指。すべてこの手の中にあつた。

「来年も一緒にこよううね」

そういっていた。

「来てないじゃないか……」

ぐつと目をつぶった。奥から熱いものがこみ上げてくる。そして脳裏にあのときの記憶が甦つて

「遅かつたですね、矢田先輩」

「…………？」

伏せていた顔を上げる。聞き慣れた声、柔らかな口調。それは間違いない

「七里！」

「…………えへへ、お久しづりですね」

「嘘だろ…………」

彼女は白いコートに身を包んで、ニコニコ笑つて立つていた。

「心配かけて」「めんなさい」

「「「」「ごめんなさいじやないよ！」」

僕は嬉しさのあまり笑いながら彼女に歩み寄つた。大声を上げたので周りから視線が浴びせられる。それはどこか哀れなものを見るような目に見えた。だけどそんなこといいじゃないか、僕の元へ七里は戻ってきたのだから。

いや、待て。七里はもういないはずじゃ……。

一気に心が冷える。僕はいつたい何をしていいのだろうか。田の前のは何だ。七里だ。七里だけど七里じゃない。

やばい。

「す、すいません！」

近くのサラリーマンを呼び止める。

「どうした」

彼は疲れた力のない田代ひらを見た。

「彼女が見えますか？」

「彼女？ どこに？」

「ここです！」

僕は七里のいる場所を指さす。彼女はそこにいる。それなのにサラリーマンは首を傾げ「疲れてるんだよ、帰つて休め」とだけ言つとどこかへ言つてしまつた。

なんなんだよ。本當。

〇二話「十畳との戯余」（後書き）

じんじみちせ、まなつかです。

本物ではないのタイトル「2口間の幻想」だったんですね。やつぱり若者には「これかな」と思って、いつしました。すると友人に「気持ち悪いー」とて言われました。ひどい。さて、それではこのへんで。

03話「冬に咲いた、僕のタンポポ」

「……だから見えないんですよ、他の人には」

彼女はわずかに微笑みながらうつむいたままそうつぶやく。その声は雪のように儂く、煉瓦のタイルに吸い込まれて消えてしまった。

「いつまでこうしていられるんだ」

僕はすぐるような思いを奥歯ですりつぶしながらやつと言葉を吐いた。

場所も変えた。人通りが少ない公園のベンチ。誰もいない、夜の8時。

「今日と明日です。そうしたらもう

「……そっか」

ため息をつく。白い息が煙草を吹かしたように一直線にできて、消える。

「じゃあ

僕は立ち上がり、座っている彼女に手を差し伸べた。

「遊ぼう、一人で。残された時間はあまりないんだろ？ ほら、早

く

彼女は一瞬驚いた表情を見せたがすぐにタンポポのような笑顔を咲かせて立ち上がった。

「行きましょう！」

「どこに行きたい？」

「んー、とりあえず夕食が食べたいです。……あ、もちろんレスト

ランではまずいのであなたの家で

「よっしゃ、じゃあ何か買って帰るわー！」

そつと公園を抜け出した。僕らはしつかりと手をつないでいた。七里がどこか行ってしまわないように必死だった。

03話「冬に咲いた、僕のタンポポ」（後書き）

こんにちわ、まなつかです。

いや、寒くなりましたね。風邪を引いたりしていませんか？
手洗いうがいをしつかりしましょうね。

日々平和のホームページが微妙に更新されています。

今日は写真をうらしたのでご覧になる方は活動報告のページ、またはプロフィールのところにアドレスがありますのでそこから飛んでください。

それでは。

04話「灯油のこおじ」

スーパーでオードブルなどといつものを初めて買って家に帰った。一人暮らしのマンション。そこそこの年収なのでそこそこの部屋だ。冷え切った部屋に明かりを灯すと少しほとほと暖かくなつたような気がする。

「うーーー、寒い寒い……」

「おーおい、幽霊に感覺なんてないよね」

レジ袋を食卓の上に乗つけながらストーブの電源をつけてひたすら火がつくのを待つて居る背中にそう言つた。

「えへへ、寒くないけどなんとなくそんな感じがするんだよ」

「そんなもんかね」

「そんなもんですよー」

しばらくすると「ーーー」という音とともに灯油の臭いが辺りに立ちこめる。今年は節電の冬だのなんだのあって会社でも灯油ストーブの使用が奨励されているのだ。まことに馬鹿馬鹿しいと思つがなんだか懐かしい気分に浸れるのである。

「わあ、つきましたよー！ 暖かいです……」

めらめらと燃える青い炎に白い手をかざして居た。僕もその隣にかがんで手を並べる。

「暖かいね……」

「そうですよね」

まつたりとした時間が流れる。その時間が永遠にも思えるという表現があるが、まさしくそれが当てはまる、そんな時間だ。僕も彼女も。

「あつ、ちょっと待つて。外出でみて。なんか来てるみたい」

「彼女が急に思いついたよつて言つて」

「わかった。行ってみる」

立ち上がりつて玄関の方へと向かつた。天界か何かからの贈り物だらうか。いや、そもそも七里は天界から来ているのだろうか？いや、天界なんてあるのだろうか。じゃなかつたら何が？

扉を開けると一気に冷気が吹き込んできた。外に出て確かめてみる。後ろでドアが閉まる音がする。

「ああ……」

夜空が綺麗だ。

……これなのだろうか。いや、だつたらわざわざ外に行かせなくともベランダから見えるはずだし……。
しばらく待つても何もない。

諦めて戻ることにした。銀のドアノブを引いて開けて中に入った。

05話「ティナー・トーク」

「お帰りなさい、慧」

「……は？」

言葉を失った。田の前には正座で七里が座っている。笑みを浮かべながら続ける。

「お風呂にします？」「はんにします？…………それとも……」

「おいおい、いやいや待て待て待て待て」

「えつ？ 七里七里七里、ほしいほしいほしいよーう？」

「いやいやいや、なんなんだよー……っていうか、「よーう？」って

なんなのセー！」

「ふふ」「ふふ」

彼女は笑うと黙つて僕に返事を促した。

「わかったよ。『ご飯にしよつ』

「えーっ、そこ『七里がいいよ』っていうことひでじょ？」

彼女は笑いながらキッチンの方へと姿を消した。

僕はふうとため息をついて靴を脱いだ。隣には彼女の靴がある。泥や草などがついてひどく汚れていた。

「早くしてくださいよ。もう温めあるんですからね」

奥から声がした。慌てて上がって自分の椅子についた。

「じゃあ、いただきますー！」

「いただきます」

二人でテーブルを挟んでの食事。なんだか

「なんだか私たち夫婦みたいですよね。あ、または中学生とかが食卓に彼女を招いたような感じです。ほら、あるじゃないですか」

頬が緩んだ。

「はは、そうだな。お母さんとかがおかわりどう？ ありがとう！」

ざいます。とかね」

「あ、そういう経験あるんですか？」

「まさか、ないよ。憧れていたなあ、そういうのこ

「わかります。恋人を招いた食事っていうのトクベツな感じがしますよね」

一人でチキンをつつきながら会話が弾む。この空いた空白の一年間を埋めるように僕らはずっと話した。お腹が満たされていく、そして心も満たされていった。

05話「ティナー・トーク」（後書き）

感想・評価・お気に入り登録をしていただけたとしても嬉しいです。

「ねね、まだ八時ですよ。どこか行きません?」

七里が僕に詰め寄ってきた。顔が近い。その顔は確かに生きている人の顔だった。どこもおぼろげなところなんてない。そして微かに懐かしい彼女の香りがする。

「いいよ、どこに行きたい?」

鞄を持って立ち上がる。

「えーっと、とりあえず外にでましょ!」

「わかった」

僕はコートを羽織ると彼女と一緒に外にでた。がちちゃんと鍵を閉めてふうとため息をついた。

外は静かだつた。遠くで犬の鳴き声がするくらいだ。そして肌を刺すような冷たい風が時節僕らに吹き付けてくる。空を見上げると何も見えなかつた。そう、曇つていてるのだ。

「なんかどんよりした天気ですね」

「そうだな……雪でも降るかな」

「えつ、やつた! ホワイトクリスマスですよ」

「はは、去年はからつと晴れてたもんな」

彼女の表情からふつと笑顔が消えた。なにがぶつぶつぶつぶやいている。

「どうかした……?」

「あ、いえ。なんでもないです」

「んじゃあ、どこに行く?」

「公園行きません? ほら、ミドリ公園」

「なんでミドリ公園なんだい? 電飾ツリーもないよ?」

「だからいいんですよ。人気がないじゃないですか」

「あ、ああ……そつだつたね」

すっかり現実を忘れてしまつていた。どこか心が締め付けられる

ように痛む。

「それじゃあ、レッツゴー！」

「おー……」

寒さにガタガタ震えつつ僕らは徒歩23分の公園へと向かったのである。

06話「外へ」（後書き）

感想・評価をいただけると嬉しいです。

公園に着いた頃には深夜の11時頃だつた。アサリの貝殻のモニメントの噴水の前のベンチに僕ら一人は腰をかけた。僕はちょっと待つてと言つて自販機でコーヒーを買つ。

「そういや、七里は苦いの苦手だつけな」

そんなふとしたことが思い出される。昔はデートのたびに奢つていた。苦いのが嫌で毎回甘そうな奴を飲んでいた。試しに一口もらうとブラック派の僕は糖尿病になつてしまふのではないかと思うくらい甘かつたのである。その液体が入つた缶が鉄の箱から音を立て落ちる。周りは静かで人の気配はない。

「うつ……

頭がふらふらする。

ぐつとこめかみの辺りを押さえてしゃがみ込んだ。

「……っ

眉間にしわが寄る。今までにない頭部全体の激しい痛み。視界がぼやけていく。

遠くで自販機のルーレットが回る音がする。ガーガーガー。外れだ。

頭の端から何かが消し飛んでいくように意識が薄れていく。

七里の顔が見える。それも消える。部長の顔だ。いつも怒つている部長が泣いていた。それも消える。社長の顔だ。いつもにこやかに壇上でくだらないシャレを言つては一人で笑つている社長がぼんやりとした表情で何か見ている。その先を見ると母親の顔があつた。僕の母さんは父さんの暴力をずっと受けっていた。そして何年か前に死んだ。その母さんはアザもなく綺麗にほほえみかけてきた。大丈夫、怖くない。それだけ言つて消えた。
なんなんだこれは。走馬燈なのか。

そして父親が見えた。暗闇の中闇雲に走っている姿を僕は上から見下ろしていた。何かから逃げている、そう見える。

父親の姿が消えると何も見えなくなつた。

〇 7 話「記憶」（後書き）

感想・評価をいただけると嬉しいです。

08話「伝えたい想い」

気がつくと冷たいコンクリートに横たわっていた。ふと顔を上げると2本の細い脚がある。

「大丈夫？」

上から氷も溶かすような温かい声が降り注いでくる。

「……ああ」

僕はゆっくりと立ち上がり、手に握りしめていた缶を反射的に離した。

「あちつー！」

「あはは、自販機のあつたかーいは信用しちゃダメですよ！」

「彼女は缶を拾うとほほえんだ。」

「ちゃんと覚えてくれたんですね……私の好みも！」

「……ああ、もちろん」

「ありがとう」

そう言つて彼女は目を細めた。そう、この彼女の癖も覚えている。

これは

「んつ」

キスをして そつ示しているのだった。

僕は彼女を強く抱きしめた。

そして更に更にと奥に彼女を感じていく。身体の奥、心の奥……
すべて何もかも。

「七里……つ」

七里は絶対に失いたくない。

もう、七里のいない時間なんて嫌だ。

心の奥から湧いてくる感情を抑えきれるはずもなく強く強く抱きしめたまま奥歯を噛みしめて泣いた。

「矢田先輩……」

彼女は泣いた子供をなだめるようにそつと腕を僕の背中に回した。手に持っていた缶の温もりが微かに感じられる。

「大丈夫ですよ、私なんていなくても」

「そんなことない」

必死に嗚咽を堪えながらそう言ひ。

「ずっと寂しかった。七里がいなくなつてから世界がつまらなく感じた。七里の代わりはいないんだよ」

「…………そうですね……。私も矢田先輩の代わりなんていませんから」

彼女の声も震えていた。

噴水の水が跳ねる音だけが僕らの行方をじつと見つめているように感じた。

08話「伝えたい想い」（後書き）

感想・評価などをいただけると嬉しいです。

〇九話「僕、彼女、心」

「これからどうする?」

「あの……展望台見に行きたいです」

「展望台? ああ、川瀬口トップランドのアレ?」

「はい」

川瀬口トップランドの展望台といえば、今この辺りでもっとも話題になつてゐるテーススポットの一つだ。今年の夏に開業したので七里とは一度も来たことがない。

「いいよ

「やつたあ

彼女は嬉しそうに笑うとぐつと親指を立てた。僕も笑つてぐつと親指をたてた。この時僕は表面だけでも笑つていようと思つた。彼女のいられる残り短い時間 大切にしなければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0482z/>

僕と彼女の最期のChristmas

2011年12月16日17時49分発行